

身投げする女

野村胡堂

—

ガラツ八の八五郎は、こんないい心持になったことはありません。
ん。

親分の銭形平次の名代で、みょうだい東両国の伊勢辰で鱈腹飲んだ参会たらぶくの
帰り途、左手に折詰をブラ下げて、右手の爪楊枝つまようじで高々と齒をせ
せりながら、鼻唄か何か唄いながら、両国橋へ差しかかって来た
のは真夜中近い刻限でした。

身投げする女

借着ながら羽織を引っかけて、懐中ふところには羅紗らしやの大紙入、これに

は親分の平次が、人中で恥を搔しんしょういちゃ——と一分二朱を入れてくれたのですから、自分の身上しんしょう、六十八文と合せて、八五郎すつかりいい心持になったのも無理のないことです。

折柄の月夜、亥刻よつを過ぎると、橋の上もさすがに人足が絶えま

す。
「おや？」

ガラッ八は立止りました。ツイ眼の前へ、人魂ひとたまのようにフラフ

ラと行くのは、後姿ながら、若くて美しそうな娘、何やら思案に暮れる様子で、深々と顎あごを埋め、襟の掛ちちぶぎぬった秩父絹あわせの袷、潮垂れ

てはいるが、赤い可愛らしい帯、すらりと裾を引いて、草履ぞうりの足音も、ホトホトと力がありません。

娘はガラツ八の跟ついて来るのに気が付かなかったものか、よろけるように欄干らんかんに凭もたれると、初冬の月を斜ななめに受けて、鉛色よどに淀んだ川の水を、ジイッと魅入られるように眺め入りました。

後おくれ毛を搔かき上げる繊弱かよわい手、ホッと溜息を吐く様子までが、蹙しぼ音を忍しのばせたガラツ八には、手に取る如く見えるのです。

娘はしばらく涙に暮れる様子でした。フト、後ろからガラツ八の近づくのに気がつくのと、草履を脱いで、その上に何やら紙片を置き、簪かんざしを重石おもりにして、

「南無——」

欄干へ攀^よじ登ったのです。

「危ないッ、待った」

後ろから飛付いたガラッ八、危うく欄干を越しそうにした娘の身体をもぎ離すと、それを抱き上げたまま、力余って後ろざまによろけます。

「あれーッ、放して下さい」

必死ともがく娘。

「とんでもねえ、放したら又飛込むだろう。どんなわけがあるか知らねえが、死ぬのは不了簡——」

「いえいえ死ななきやならないわけがある、お願いだから放して下さい」

華奢きやしやで骨細な娘ですが、必死の力を出すと、腕自慢のガラツ八にも容易には押え切れません。後ろから羽搔はがいじめ締めに、欄干へ寄せないのが精一杯。

「死んで花実が咲くものか、——第一この寒空、死にようもあるのに、身投げに季節しゆんじゃねえ、——落着いてわけを話せ」

「お願いだから殺して下さい、どうせ生きていられない私」
身を揉むほどに、娘の身体がしつとり汗ばんで、燻蒸くんじようされた脂し粉ふんの匂いが、揉み合うガラツ八をふんわりと押し包みます。

「どんなわけがあるにしても、こうなつては見殺しには出来ない、俺も男の端くれだ、及ばずながら相談にも乗つてやろう、先ず訳を話せ」

「親も兄弟もあるのだらう、後に残る者の歎きも考えて見るがい」

娘はしだいに気が落着いたものか、争うのを思い止まると、ガラッ八の胸に顔を埋めて、シクシクと泣き始めました。思い詰めた興奮が去ると、急に悲しみが蘇生よみがえつたのでしよう。

「いったい、何が何で死ぬ気になったんだ、話して見るがいい」

「色恋の沙汰さたか」

「娘は激しく頸くびをふりました。」

「それとも、よくある話だ、主人の金を落したとか、盗まれたとか———それでもない？」

「じゃ、若い娘が死ぬほどのわけがないじゃないか、一体どうしたというのだ」

ガラツ八の手は何時の間にやら、娘の背を撫でて、その泣き濡ぬれた顔を覗いております。

「——叔母さんが、身売りをしろって言うんです」

「何？ 叔母さんが、身売れって？——そんな馬鹿なことがあるもんか、親の承知しない者を、叔母が何と言ったって——」

「でも、私は親のない子で、叔父さん叔母さんに藁わらのうちから育てられました。この暮のくり廻しが付かないから、吉原へ身を売れと言われると、いやとは申されません」

「——」

「どうぞ殺して下さい。生きていても望みのない身体、小さいと

き死別れた、ほんと 真実の両親のところへ行くのが、せめてもの望みで
ございます」

顔を上げた娘、涙はもう乾いておりますが、月の光りに洗われ
たようで、その美しさというものはありません。精々十八、九に
もなるでしょうか、言いようもなく哀れ深い姿です。

「とんでもねえ、身売りがいやだから死ぬというのは、若い者に
は無理のないことだが、どうせ金ですむことなら、何とか話し合
いも付くだろう。ほんの少しばかりだが、これだけでも、持って
行くがいい」

ガラツ八はふところ懐中かららしや羅紗の大紙入を出すと、その中から一分二

朱と六十八文の全財産を懐紙に捻ひねつて、娘の懐中に押し込みました。

「でも、私の身の代金は、年一杯で手取り三十五両と、女衞ぜげんが決めて行きました」

娘は少し困った顔を挙げます。

「なるほど、三十五両と一分二朱六十八文じゃ少し違い過ぎる、———こうしようじゃないか、俺がこれから叔父さん叔母さんに逢つて、この暮くれに入要の金かねが、掛値かけねの無いところいくらか訊いて、それだけ工面してやろうじゃないか」

「いえ、そんなにまでなさらなくても———」

「そんなことで人一人——それもお前のような綺麗な娘の命を助けられるなら、俺も本望というものだ」

「暮に要る金はたった五両、わけがあつて、私は知っております。

手取り三十五両も入ったら、また博奕ぼくちの元手になることでしよう」
娘はやるせない姿でした。たった五両で死ぬ身が、我ながら疎うとましかつたのでしよう。

「五両位なら何とかなるだろう、俺の叔母の家はツイそこだ、来て見るがいい」

「でも——」

渋しぶる娘の手を取るように、ガラツ八は叔母の家へ向いました。

日頃ガラツ八の馬鹿馬鹿しさと純情さに打込んでいる独り者の叔母は、五両位のこととは、何とかしてくれそうに思えたのです。

二

それから三日目。

ガラツ八の八五郎は、銭形平次の家へ久し振りでやって来ました。

が、格子こうしへ手を掛けて、

「ハッ」

と身を退いたのも無理はありません。中から後光ごこうが射したように思ったのは、いつぞや両国橋で身投げを助けた娘が、平次と女房のお静に送られて、沓脱くつぬぎへ下り立ったところだったのです。

ガラツ八はあわてて飛退くと、庭木戸の蔭へ身を潜ひそめました。あの晩のロマンスは、さすがに打明けそびれて、平次にも言わずにおりますが、秘し隠しにしていたガラツ八の身分を搜り当てて、娘がわざわざ礼に来たのでしよう。

こいつはいけねえ——、ガラツ八はそう言いながら、額さかから月代やきを掌てで撫であげました。

そのうちに、もういちど丁寧ていねいに挨拶をして、娘は帰って行く様

子。真昼の光の下で見ると、少しふけて、二十一、二と踏めますが、身装みなりは思いの外リュウとして、その明るく愛嬌あいせう作つくった美しさも尋常ではありません。

「八、何を驚くんだ」

銭形平次は早くも見つけました。

「へエ——」

「女の子が怖こわいのか、戸袋の蔭かげなんかへ隠れて」

「怖いわけじゃありませんが、ヘッヘッ」

「いやな笑いようだな、まア入れ」

平次は吞込み兼ねた様子で八五郎を誘さそい入れました。美しい小

春日が畳の上を這って、今まで敷いていたらしい、薄い座蒲団からユラユラと陽炎かげろうが立ち昇ります。

「あの娘こは何を言ったんで、——親分」

ガラツ八は頸くびのところを搔きながら、膝小僧を揃えました。

「つまらねえ紛失物ふんしつものさ、——ところで、お前の方にも心当りがありません。いったいあの娘をどこで口説くどいたんだ」

平次は何やら嗅ぎ付けた様子で、ニヤリニヤリと陣を布きます。

「口説いたわけじゃありませんよ、親分」

「じゃ口説かれた口かい。たのもしいぜ、八」

「冗談で」

「早く白状しな、——俺は出て行かなきゃならない」

平次は少しも責め手を緩めません。ゆる

「笑っちゃいけませんよ、親分」

「笑やしないよ、子供の時から、俺は睨めっこの名人さ、可笑しくたつて笑わないから」

「弱ったなア、親分。からかつちや話が出来ねえ」

「贅沢な男だな、さア、言いねえ」

そんな事を言われながら、八五郎はとうとう三日前の晩の事を、
一伍ぶしじゆう一什話させられてしまいました。

「叔母さんから五両借りて、暮の凌しのぎにさせるつもりで渡すと、

娘はそれを握って、一目散に駆け出しましたよ。身売りをせず
済んで、どんなに喜んだか解りません」

ガラツ八はこう語りおわりました。

「そんな親切の籠った金を貰って、娘は手前てめえの名も訊かなかつた
のかい」

「へエ——」

「少し薄情だと思わなかつたか」

「面喰めんくらっていたんでしようよ、親分」

「仏様だな、手前てめえは」

「でも、ここへ尋ね当てて来たじゃありませんか、——叔母の家

からでも訊いたんでしよう」

八五郎は娘の行動を理由付けるのに一生懸命でした。

「それが大笑いさ、あの娘は両国橋で助けて貰ったのは、八五郎あにい兄哥とは夢にも知らねえ。まるつきり違った用事で、この平次を訪ねて来たのさ」

「へエ——」

「驚くなよ、八」

「——」

八五郎はゴクリと固唾かたずを吞みました。平次のニヤニヤした顔が、何をとんでもない事を言い出すか解らなかつたのです。

「あの娘は、鳥越とりごえの平助店だなにいるお秋という者だ、——叔父、叔

母といつてるのは全く他人で、これは飴屋あめやの丑松とお徳という、

仕事の相棒さ。いずれよくない事で溜めたものらしいが、とにかく、二人で拵えた金が、驚いちゃいけないよ、八、二百九十五両」

「フーム」

「三日前に五両一分入って、ちょうど三百両一分になった。三百両になったら、百両ずつ三人で分けるといふ約束だったが、その

時ちょうど肝心かんしんの飴屋の丑松が、木更津きさらづへ行つて留守、帰つて来

たところで、三人立会いの上、隠した場所から取出したのは昨夜ゆうべだ。封を切つて見ると、中の三百両は綺麗になくなって、蛙かえるも何

にもいないという話さ」

「——」
これを聞かされるガラツ八の鼻の窓の大きいこと。

「お秋は思案に余つてここへ飛んで来たのだよ、——どうせまともな商売で儲けた金ではないが、盗んだ金や掏すった金じゃない。三年越身みとせごしを削けずる思いで溜めた三百両を、一人占めにされちゃ叶かなわない。いずれ丑松かお徳の仕業に違いないから、何とかして取戻してくれ。とこういう頼みだ」

身投げする女

「——」
「俺はお上から十手捕縄を預る人間だ。世上の揉事もめごとや、欲得よくだずく

の話なら乗出さないが、三百両は何といつても大金だ。盗賊の訴えがあれば捨てておくわけに行かねえ」

「――」

「だがな、八。手前が身投げを助けて、五両で命を買った女が、本当にあの娘なら、話はなかなか洒落しゃれているぜ。俺の代りに行つて見る気はないか」

「へエ――」

ガラツ八はつままれたような心持でした。が、娘の正体を突き止めて、どんな顔をするか、見てやりたくないでもありません。

第一、紛失ふんしつした三百両を捜し出して、あの娘の前へ積んでやる

のは、いつぞやの晩、五両一分二朱六十八文の金をやった時よりも、もつとよい心持になれそうな気がしたのです。

三

鳥越の平助店だなは、袋路地の別世界を形成した、総後架そうこうかの前の四軒長屋でした。

路地の外がんぼに頑張がんぼって、しばらく様子を見てみると、鉄砲てっぽう箆ざるを担たなこいだ屑屋くずやが一人、何にも言わずにノソノソと入って行きます。多分、この路地に住む店子の一人でしょう。

「ちよいと、待つてくんな」

ガラツ八は呼止めました。

「へエ、へエ、何かお払いでも——」

四十年配の少し世の中を茶にしたような髯面が、それでもいんぎん慇懃にガラツ八の前へ小腰を屈めました。

「払い物じゃねえ、ちよいと訊きたいことがある。そこの長屋の事だが——」

「へエ、私の家は左側の二軒目で」

「そんな事じゃない——とにかく、外へ出て一杯やりながら訊かうじゃないか」

「へエ——」

屑屋は自分の家へ^{ざる}箆^{ほう}を抛り込むと、黙って^っ跟いて来ました。こんな事には慣れてしている様子です。

町へ出ると、すぐ見つかった飲屋。^{なわのれん}縄暖簾の中を覗いて、人のいないのを見定めてから入ると、^{たるてんじん}樽天神をきめ込んで、^{またた}瞬く間に二本三本と倒します。

「さア、親分、訊いて下さい。何でも言いますぜ、へッへッへッ」
屑屋は酔いが廻ったらしく、胸をはだけて、可笑しくないのに^{ひくっ}卑屈な笑いようをしております。

「実は、あの路地の中に住んでいるお秋という娘のことだが——」

八五郎は四方を見廻しながら小声で切出しました。あたり

「へッ、へッ、へッ、へッ、——知ってますよ、親分も引っ掛けられた口でしょう。——枝ぶりの良い柳原の松ですかい、それとも両国の橋の上で——」

「——?」

「土左衛門の真似はお秋がいかにおんなかつば女河童でも時候じゃないから、やはりブラ下がりの口かな」

屑屋はすっかり呑込んで、身振り入りで浮かれております。

「何だい、それは」

「知ってますよ、親分、——親が病気で身を売らなきやならない

——とか、主人の金を五十両落つことした——とか、泣きながら、恐ろしく色っぽく持ちかけるでしょう。あれが術てなんで、へッへッへッ

「——」

「こちとらがやったんじゃ、お笑い草だ。ブランコの足を引張られるか、川へ突き落されるのが関の山だが、——若くて綺麗な新造はトクだね、親分。十人が十人、有金引ほたつ叩かせられて、娘が

いやがるのも構わず、ここまで送って来る、——それから翌る日知らん顔をしてここへやって来て、娘の身許を訊くとね、——筋すじ

書がきは大抵決ったものさ」

「ね、親分。悪いことは言わねえ、黙って帰んなさい、荒立てると恥はじを大きくするばかりだ。あのお秋という娘は、虫も殺さねえ顔をしているが、海千山千の、下っ腹に毛のねえエテ物さ。丑松は飴屋崩れの凄^{しい}男で、お徳はその上を行く塩っ辛い大年増だ。四つに組んでもトクしろもののいく代物じゃねえ。屑屋を渡世の俺でさえ、あの三人はよけて通ることにしているのさ」

「——」
ガラツ八の八五郎も、正に一言もありません。身投げ渡世の女を救かたって、五両一分二朱騙かたられたとは、さすがに言うわけにも行

かなかつたのです。

「こいつは大笑いさ、——一杯飲まして頂くから言うんじゃねえが、あの路地はいを入つて、お秋の家を未練がましく覗のぞこうものなら、やつた金へ利子が付く。ヘツヘツ、あつしに逢つてからくりをみんな聞いたのが、親分の仕合せだぜ——」

屑屋ちようこうぜつの長広舌は、どこまで続くか解りません。

「俺はそんなんじゃねえ、これを見るがいい」

ガラツ八はあまりの事に我慢がなり兼ねたものか、懐をくつろげて、チラリと十手の房を見せました。

「ヘエツ、親分さんは、お上の御用うけたまわを承る方で——こいつは知ら

なかつた、とんだ事を申しました、勘弁なすっておくんなさいまし。ところで、いよいよあの三人にも年貢ねんぐの納め時が来たのですかい、親分さん」

屑屋は急にペコペコし始めました。

「いや、大金が紛失ふんしつしたと、娘が訴人して出たよ」

八五郎は、身投げの狂言に引っかけられた一人と思われたくないばかりに、ついこんな事まで言ってしまったのです。

「へエ、あの娘がですかい。へエ、三年越みとせごしの身投げ狂言だから、

三百や五百は持っていたかも知れません。——そいつはいい気味

ですね、——もつと尤も泥坊は判っているようなものだが——」

「判っている？」

「長屋はたった四軒、右側の二軒は空店あきだなで、お秋の家は左側の奥、私のうちの隣りです。稼業柄かぎようがら思い切り汚な造りな暮し向だから、

外から泥坊が入りっこはありません。金のあるのを知っているのは、相長屋のあつしと、あの三人だけでさ。泥坊はあつしでなきや、丑松かお徳で、こんな解り切ったことはないでしょう、親分さん、
——はばか憚りながらあつしには覚えがねえ。すると、やはり丑松かお

徳」

この際限もない屑屋くずやの話を、ガラツ八は神妙に聞いておりました。三百両の紛失は知らなかった様子ですから、泥坊は多分丑松

かお徳でしょう。

その頃の三百両は、今の三百万円にも相当する大金で、紛失の訴えがあれば、御用聞が一応調べて見るのも、当然のことでもあつたのです。

四

ガラツ八は屑屋に別れて、あめや飴屋の丑松の家へやつて行きました。

「御免よ、——丑松はいるかい」

荒い格子を覗く迄もなく中は見通しの二た間、形ばかりの古い

簞笥たんすが一棹、葛籠つづらが一つ、割れた獅嚙火鉢しがみひぼち、芯しんの出た座蒲団など

——見る影もない惨憺さんたんたる住居です。

「誰だい、人を呼び捨てになんかしやがって、面つらを見せろ」

隅っこでとぐるを巻いていたらしい中年男は、襦袍どてらへ袖を通して、起き上がりました。

「大層な勢いだな——少し調べることがあつて来たよ、起きて貰おうか」

「へエ——」

目ざとく十手の突つ張つた懐中ふところを見ると、丑松は弾き上げられたように飛起きました。上役人だけは、極度に恐れるように習慣

付けられた人種だったのです。

「紛失物があったそうじゃないか、どこにその金が置いてあったんだ」

ガラツ八は精一杯の威儀いぎを作りました。

「へエ、恐れ入ります、——御苦勞様で、へエ」

「そんな事はどうでもいい、俺の言う事に返事だけしてくれ」

「へエ、相済みません。——金は三百両、瓶かめに入れて封ふうをして、

お勝手の落しの中に置きました」

「奪られたのは」

「三日の間でございます。三日前にお秋が持って来た五両一分二

朱と六十八文のうち、二朱と六十八文は当座の小遣こづかいに取除け、五両一分を足して、丁度三百両と一分になったのを、封印をして落しに入れたまま、あっしは木更津へ参りました」

「何の用事で行ったんだ？」

「儲もけ口で御座いますよ、親分さん、——が、当てごとは向うから外れて、ボンヤリ帰って来たのは。昨夜ゆうべ。ここで三百両を三つに分けるつもりで瓶かめの蓋を開けると、中は空っぽじゃありませんか」

「——」

「盗ったのはあっしはとお徳とお秋のうち、それに違いありません

が、あつしは木更津へ行つて昨夜帰つたばかり、お秋は自分で稼かせいだも同様の金ですから、取る筈もなし」

「すると、お徳が怪しいと言うのか」

「そんなつもりで申したのじゃございません。近所だつて、正直者ばかり住んでいるわけじゃありませんから、へエ——」

「そのお徳はお前の女房じゃないのか」

「世間じゃそう思い込んでおります。もつとも、お徳もそのつもりでいるようで、へッへッへッ、焼餅やきもちばかり焼いて仕様がありません」

不思議な道德を持った人達、ガラツ八は吞込み兼ねて顎あごを長く

しております。

「女二人はどこへ行つたんだ」

「お徳はお神籤みくじを引きに行きましたよ。お秋は大方番所へでもお願いに行つたんでしよう、親分さんが来て下すつたところを見ると」

「お前は自棄やけになつて、朝から飲んで居たのかい」

「へエ——」

これはガラツ八の探偵眼にもよく解ります。茹蛸ゆでたじのように真っ赤になつて、熟柿臭じゅくしくさい息をフウフウ吐いている丑松だったので。

「その落しと、瓶かめを見せて貰おうか」

「へエ——」

案内されたのはお勝手、かなり重い土竈へつついをどけて、揚げ板を剥はぐと、中は三尺四方位の穴になっております。隙洩すきもる光線で一面の埃ほこりは見えますが、瓶も何にもあるわけではありません。

「瓶は？」

「こつちに出してあります」

流しの前に据えたのは、一升入りほどの塩瓶しおがめ、蓋も封印もケシ飛んで、浅ましく空っぽの中を、天窓から落ちる微光にさらしております。

「お前さん、お神籤みくじは大凶だいきょうだよ、人の気も知らないで、本当に」

ブリブリしながら帰って来たのは、丑松の女房のつもりでいるらしいお徳です。二十前後、醤油で煮^にべめたような大年増ですが、どこか気の強そうなところがあつて、丑松を取つて押える貫禄は充分です。

「大凶は吉に変わるといふぜ」

「だって癩^{しゃく}じゃないか、四文払つて、大凶の籤^{くじ}なんか引かされて」
お徳はお勝手口からヌツと入ると、出合頭^{であいがしら}、ガラツ八と鉢合せをするほど近々と対面してしまいました。

「お上の御用を務めていらつしやる親分さんだよ」
と丑松。

「おや？」

お徳は面喰つて、しばらくは挨拶も忘れた様子です。

「三日の間、この家を明けたことはないのかえ」

ガラツ八は平次ゆず譲りの事務的な調子で、その驚いたところを突っ込みました。

「私は飴を売るのが商売だし、お秋さんは他に稼業かぎようがあるし、夜も昼も家を明け通しですよ」

「お前か、お秋が、一人で留守をしたこともあるだろう」

「今までだってありますよ」

「近所の者が忍び込んでも、知らずにいるわけだね。ここは一番

の奥だから？」

「近所だって、お向うは二軒とも空いているし、物騒なのは隣りの屑屋より外にやありやしません。清吉と行ってね、人間は馬鹿きようじょうもちげているが、兇状持ですよ」

「何の兇状持だ」

「畑荒はたけあらしの、——本人が自慢で言うんだから嘘じゃありません。

沼津にいたるとき、西瓜畑を荒して、それが表沙汰になって三十叩かれて追放された——つて。もつと尤も丁寧もつとに勘定したら、二十七しか叩かなかつた、お上にもお情けはあるんですってね、親分さん」

どうもこの女から筋の立った話を訊き出すのは、容易わさの業では

ありません。

しばし待ちましたがお秋は帰らず、ガラツ八は物足りないような安心したような心持で引揚げました。引揚げる前に、箆筒つづらや葛籠つづらや、押入や天井裏や、一応家の中を見たことは言うまでもありません。

五

「親分、大変ッ」

ガラツ八が飛込んで来たのは、翌る日の朝でした。

「何が大変なんだ、——虫持じや付き合いきれないぜ、毎日一度
ずつ、その『大變』の振出しを吞まされちゃ」

平次は房楊枝ふさようじを井戸端の柱に植えて、手水鉢ちようずばちに水をくみ入れながら、こう振返りました。

「あの女が殺されましたぜ、親分」

「どの女だ」

「飴屋のお徳が、今朝トブ板の上へ四つん這いになっていたのを、
屑屋くずやの清吉が見つけたんで」

「そいつは大變だ」

平次は大急ぎで顔を洗うと、着換えきがもそこそこ、鳥越の平助長

屋へ飛びました。

「寄るな寄るな、下手へたに顔を出すと、掛り合いだぞ」

町役人と番太が、警戒の声を洩からしている中へ、平次と八五郎は息せききって駆けつけたのです。

「あッ、銭形の親分さん、丁度いいところへ、八五郎親分さんも御一緒に——」

平次はそれを掻き分けるように、長屋の裏へ廻りました。

「あッ」

物馴れた眼にも、その惨憺さんたんたる有様はたじろぎます。お徳は後ろから頸筋を深々と切られて、半分開けたドブ板に手を掛けたま

ま、碧血へっけつの中に崩折くずおれていたのです。

刃物はよく切れそうな菜切庖丁なつきりぼうちようが一挺、これでやりましたと言わぬばかりに、死体の側に。

「これはどこのだ」

平次は取上げました。

「へエ、——私の家ので、世帯を畳む人の払い物の中から、使えそうなのを残して置いたんで」

屑屋の清吉は神妙そうに顔を出しました。

「どこに置いてあった」

「お勝手にございますよ、親分さん。でも、戸締りとじまなんかしたこ

とがありませんから、案内知ったものなら、ちよつと戸をすかしただけで、わけもなく柵たなから取れます」

清吉は一生懸命の弁解でした。

「この死体の恰好は面白いだろう。八。ドブ板を剥はがそうとして、手を掛けたところを、後ろからやられた形だ、——お徳が金をここへ隠して置いて、取出そうとしたところをやられたか、それとも——」

平次はその後は言いませんでした。

その声を聞いて、家の中から出て来たのは丑松とお秋です。

「銭形の親分さん、とんだことになりました。とうとうこんなこ

とになつて」

おろおろするお秋。

「気の毒だが、金は容易よういに戻るまいよ、——下手人を捜すのはわけもないが」

「親分さん」

「もつとも、三百両と一分のうち、五両一分の施主せしゆはここにいるが、本人は思いのほか諦めているぜ」

「まア——」

身投げする女

振り返ったお秋、ガラツ八と顔を合せて、さすがに仰天しました。たった四日前の一番甘かった施主せしゆ、この長い顔の持主は忘れ

ようとして忘られる筈ありません。

ガラツ八はしかし、この娘をとがめる気にはなりませんでした。身投げや頸吊りの狂言までして、三百両の大金を稼ぎ溜めた女にしては、何という清純な美しさでしょう。

打ち続く激動と疲労に、少し蒼くはなっておりますが、歌舞伎役者のように整った身体、古い袷あわせがピタリと身につけて、乱れた毛もたしなみを失うほどではなく、激情的に赤い唇も、深い悲しみを湛たえた黒い瞳も、ガラツ八の眼には、言いようもなく美しく悩ましく見えるお秋だったのです。

金はどこを探しても見つかりません。ドブ板の乱れ工合から見

ると、多分三百両を隠したお徳が、人知れずそれを取り出そうとして、それを覗^{うかが}っていた曲者にやられたのでしよう。

丑松はその晩も留守、これは自棄^{やけ}の小博奕^{こぼくち}に夜明しをしたと解^とつて——途中で抜出して、お徳を殺す時間があったかも知れないにしても、一応は疑いの外におかれ、隣家の屑屋清吉は、いちばん不利な立場に陥^{おちい}つて、とうとう平次に引立てられてしまいました。

「俺じゃねえ、俺はそんな人間じゃねえ。正直屑屋の清吉といや、浅草中で知らない者のない俺だ」

番所へ伴れて行かれても、清吉は必死と抗弁をつづけます。

「畑荒らしの兇状持だきようじようもちと言うじゃないか」

「とんでもねえ、田舎の若い者が、西瓜すいかの一つや二つ盗ったところで、一々お上沙汰になつてたまるものか、あれは見栄を張つて、チヨイと言つて見ただけの話さ。丑松の野郎は喧嘩兇状と、博奕兇状と二つも持っていると言うから、負けているのが癩しやくにさわつたんだ」

この調子ですから、平次も手のつけようがありません。

「親分、屑屋の火鉢の中から、小判で三両出て来ましたぜ」
ガラッ八が飛んで来ました。

「どれ、見せろ、——成程、吹き立ての小判が三枚だ、これはど

「こから出した」

「国を出る時から、万一の用意に持っているんだ。お袋の形見だかたみ」
と清吉。

「嘘をつけ、あとの二百九十七両はどこへやった」

「知らねえ知らねえ、そんな事を知るものか」

「いや、知らないと言わさない、——昨夜だって、三間とは離れ
れないお勝手から庖丁を持出されて、ドブ板の上で人殺しのあつ
たのを知らなかつた筈はない」

平次は容赦ようしやもなくグングンと突込んで行きました。

「自慢じゃねえが、俺は一杯飲んで寝ると、死んだも同様だ——」

飲まない晩の事なら、そのかわり何でも知っている。飴屋の丑松の野郎が、木更津へ行つたと言ひ触らして、賭場とばで夜を更かして歸つて、お秋を誘さそい出したことまで——」

「待て待て、それは本当か清吉」

「本当も嘘もねえ。丑松を締め上げるなり、賭場を洗つて見るなり、行つたという木更津を調べりや解ることだ。あの野郎は浅草切つての悪党だが、押かけ女房のお徳がその上を越す悪党で、丑松も女房の悪党ぶりが気味が悪くなつたんだよ。それに、間がな隙すきがな、綺麗なお秋を付け廻して、口説くどき落そうとしていたんだ。第一お秋の稼かせぎというものは容易じゃねえ。柳原土手と両国の橋

の上で、この二三年の間に三百両——いや四百両も稼いでいる」

清吉の言葉には真実性があります。

「八、行って見ようか」

「二人突き合せて叩かせると、お互いに埃ほこりの出ようが違やしませんか」

「その事だ」

平次はガラッ八に清吉を預けて、鳥越の長屋へ飛んで帰りました。お徳の死体は一応家の中へ入れて、丑松はその前で茶碗酒を叩あおっています。

六

清吉の家の中から、三両、五両と順々に小判小粒が発見されました。壁の破れ目、畳の中、土竈へつついの下と、凡そ人の氣およのつかないところから、二日間に捜し出したのは、べめて十八両、あとの二百八十二両はどこへ隠したか解らず、清吉もまた、頑がんとしてお徳殺しを白状しません。

「金はその朝、死骸を見つけた時、側に落ち散っていたんだ。――出来心で隠したが、お徳を殺したのは、俺じゃねえ」と言い張るのです。

丑松は素直に、お秋を付け廻したことも、木更津へ行つたことにして、お徳の鋭鋒えいほうを避け、さ実はお秋を誘い出しにかかったことも白状しましたが、お徳を殺したことはどうしても言わず、それに証拠が一つもありません。

丑松をいちおう帰して、お徳の葬とむらいをすませ、改めて呼出そうとすると、今度は、お秋が行方不明になつた事がわかりました。「しまったッ。お葬むすびいが済んだらすぐあの娘を呼出そうと思つていたのに、——あの娘は下手人か、でなければ何もかも知つていたに違ちがひない」

平次は口惜くやしがりますが、広い江戸、姿を変えてどこかへ潜もぐり

込めば、容易のことでは見つかりません。

「あの娘が三百両を盗んで、お徳を殺したのでしようか、親分」
ガラツ八は少し平かでない様子でした。

「身投げの狂言で、三百両も稼いだ娘だ。顔は綺麗でも、あまり信用は出来ないよ」

「そんな事はありませんよ、身投げの狂言は、芝居気さえあれば出来ます。泥坊や人殺しは、あの娘に出来る芸当じゃない」
ガラツ八は妙にやつきになります。

「まあいい、俺には俺の考えがある、——世間の評判でもわかる通り、悪かったのはあのお徳さ。いやがるお秋に、あんな仕事を

さしていたんだと言うから」

「ね、その通りでしょう、親分」

「だが、あの日の朝、お秋の着物にドブ泥の着いていたことがつかなくったかい」

平次はそんな事まで見ていたのです。

「お徳の死骸を見て、びっくりして抱き上げたんですもの、溝泥どぶどろも血も着きますよ」

「もういい、——今日は少し変だぜ、八」

平次は苦笑いして、銚ほこを納めました。

「でも、これだけは聞いて下さい、親分。お秋は丑松を嫌っては

いるが、捨児すてごを拾かつて育てられた恩があるから、蔭じや丑松を庇かばつていますぜ。お徳はこの三年ばかり前に顔を出した女で、お秋に身投げきようげんの狂言を仕込み、丑松を抱きこんで嫌がるのを無理にやらせた女だ。お秋とは人柄が違いますよ」

ガラツ八は日頃に似気なく調べが届きます。

「よく聞き込んだね、八」

「それほどでもありませんよ」

「とにかく、お徳の殺されたのは暁方あけがただ。その時刻に、丑松がどこにいたか、もういちど突っ込んで見るとしよう。それからお秋の行方は江戸中に網を張って捜さがさなきやなるまい。あの娘が下手

人でも、下手人でなくとも——」

「——」

あとの一句が、八五郎には気に入らない様子でした。

「それから、二百八十二両はどこへ誰が隠したか、——金を持っている奴が、十中八九下手人に決っている」

平次はしばらく息を抜いて、誰が金を使い出すか、それを見てやろうとしている様子でした。

七

その頃から、浅草、下谷、日本橋、本所へかけて、不思議な届とどけ

出いでが続出しました。金額は定まりませんが、多いのは二十両三十

両、少ないのは一分二分、現金を紙に包んで、窓からお勝手口から、雨戸の隙間すきまから、そつと投り込んで行くものがあつたのです。

金額を調べてみると、遠くて一二年前、近くはツイ一二カ月前、柳原の土手か、両国橋で、自殺しようとしている娘を救い、その気の毒な事情に同情して、乞こわるるままにくれてやった金と、細かい端数はすうまでピタリと合っているではありませんか。

「八、お秋は金を返し始めたよ、——四五日前からやっているよ
うだが、掛り合いが面倒だから、最初のうちは誰も届出とどけなかつた

んだ、——今になつて見ると、金を盗つたのは、やはりあの娘だつたんだね」

「盗つたり返したり、おかしいじゃありませんか」

腑ふに落ちないのは八五郎ばかりじゃありません。

「とにかく、柳原の叔母さんの家へ行つて五両の金が返つたかどうか訊いてくれ、多分いの一い番に返したと思うが」

「——」

「それから、これは大事なことだが、金を返した日と時刻じこくとを訊いて来るんだよ」

「へエ」

八五郎は飛んで出ました。

それから半刻はんとぎばかり。

「親分、変なことになりましたぜ」

旋風つむじのように飛んで帰ったのです。

「何が変わんだ、八」

と平次。

「金は確たしかに叔母のところに戻してありましたよ。懐紙に包んで、

小判で五両、——ところが、窓から金を投げ込まれたのは、お徳

の殺された晩で、しかも叔母がたった一人で晩飯の後片付けをし

ている時だというから、戌刻いっくより遅くはありません」

「何だと？ 八」

「金はお徳が殺される前——その晩の宵よいのうちに叔母のところへ返されたんですぜ。親分、これは一体、どう言うわけでしょう」

ガラツ八の疑うたがいは平次の疑いでした。

「待ってくれ、——最初金が無くなって、俺のところへ来たのはお秋だ、——その後でドブ板の下からお徳の隠した金を見つけたのかな、——すると、お徳を殺したのは誰だ」

二人は顔を見合せました。が、驚きはそれには止まりません。

「ちよいと、——お話中ですが、今こんな物をお勝手へ投り込んで行った人がありますよ。すぐ追っ掛けましたが、姿は見えませ

ん」

お静が差出したのは、袱紗ふくさに包んだ、持重りのする品。解く手も遅しと、引っくり返すと、中から出たのは、五六十枚の小判と、二三枚の手紙ではありませんか。

「何だ何だ」

手紙の文句はしどろもどろで、文字は乱れ勝ちでしたが、判読すると、

お徳さんは私をおどかして、あのいやな仕事を続けさせました。三百両になったら、それを三つに分けて止す筈でしたが、

どうしても許してくれません。私はせめて自分の取前とりまえの百両だけでも、御迷惑をおかけした方へ返して上げようと思いましたが、お徳さんはいざという時になって、三百両みんな隠してしまつたのです。

平次親分にお願ひしたのは、その金を見つけて頂いていただ、足を洗いたかつたからですが、お徳さんはそれを察してさつ、どこまでもこの仕事をつづけろと、いろいろ脅かおどしました。いやだと言ひ張つたら、私は殺されたかも知れません。

そのうち三百両の金は裏のドブ板の下に隠してあることが解つたので、お徳さんが酔つて寝込んだのを幸い、そつと取

出し、鳥越とりごえさま様の石垣の穴に隠して、その晩から迷惑をかけた方へ返し始めました。柳原の八五郎親分の叔母さんへは、一番先にお返し申しました。

五六軒歩いて夜半よなかに帰って来ると、私は何にも知らずに寝込んでしまいました。その後、暁方になってお徳さんが外へ出て、ドブ板の下を調べて、金のなくなったのに驚いてるところを、後ろから刺さされたのでしよう。私の取出した金は二百七十八両ですから、まだ少しは残っていた筈です。私はこのお金をみんな返してしまうまでは、縛られても、殺されてもいけないと思いました。その上、親方（丑松）はいやな事ば

かり言うので、とうとう家出をして、三日の間に、知っているだけは皆返しました。あとに残ったのは五十三両、これは旅人から頂いたので、お家も、お名前も判らない口です。どうぞ、困っている人達にでも上げて下さい。

私はもう、するだけの事をしてしまいました。

耻はずかしい身体を、皆様のお目に曝さらすのは我慢が出来ません。今度こそ本当に身を投げて死んでしまいます。

いろいろ御恩になりました。草葉の蔭から、末永く御礼を申し上げます。

平次親分さま

八五郎親分さま

「わッ、とうとう死んじまいやがった」

八五郎はフラフラと立上がりましたが、どこへ行く当てもなく、どっかり坐りました。

「いや、まだ死なない、——身みな投げは昼じゃ出来ない」
平次は落着いております。

「でも飛込む場所が判らない」

「いや、俺にはよく判っている」

「助けてやって下さい、親分。身投げの狂言は悪いが、あの娘は

根が正直者だ」

「解ってるよ、それより先に、お徳殺しの下手人げしゅにんを挙げよう」

「誰なんで」

「お秋が庇かばったのは、育ての恩のある丑松だ。下手人は清吉でなきや、庖丁ほうちようの切味きれあじを知っているお秋か丑松だ。清吉は十八両の金を盗んだだけ、お秋はその晩もう金を返して歩いている。残るのは丑松だ。——多分こうだろうと思うよ、暁方になって丑松は賭と場ばから拔出してくると、お徳がドブ板の下で金を探してるのを見つけたんだろう。フラフラと邪魔者じゃまものを殺して三百両せしめる気になった。が、殺しただけで、金を取る前に清吉に見つけられ、驚

いて隠れたに違いあるまい。俺は最初お秋を疑ったんで丑松を厳きびしく調べなかったが、今度は逃しっこはない」

平次とガラツ八は飛んで行って丑松を挙げました。頑強に口を緘つぐみましたが、後から後からと見つけた証拠を突っ付けて、とうとう口を開かせたのは宵の口。

「親分、暗くなりましたぜ」

ガラツ八は気が気じゃありません。

「今からで丁度いいよ」

二人はそのまま両国へ向いました。

「お秋はここへ来るに違いない。お前は西にいるがいい、俺は東

の方に頑張る」がんば

平次は橋を渡って向うの方へ行きました。

×

×

それから一刻あまり、橋の上の往来の全く絶たえた頃、浜町の方から、月下の橋へ急ぎ足に差しかかった娘があります。

真つ直ぐに延びた身体、正面を向いた顔、何の憂愁ゆうしゆうもない事務

的な足どり、あまりの平静さに、ガラツ八は危うく見落すところでしたが、橋の欄干らんかんへ寄って、何の思い入れもなく、あわや身を躍らしそうになったのを見て、ガラツ八は死物狂いに駈け寄りま
した。

身投げする女



©2017 萩 柚月

「待った、——待ってくれ、死ぬには及ばねえ」

「まア、八五郎親分」

狂言とは、何という違いでしょう。娘の身体を引寄せて、犇ひしと押つけながら、胴どうぶるいをしていたのは、何とガラツ八自身の方ではありませんか。

お秋は八五郎の腕の中に任せ切って、もがきもどうもしませんでした。悲しく挙げた顔は塑像そぞうのように硬張こわばって、蒼白い頬は涙の痕あともなく乾き切っておりまして。これは満足し切った人の顔です。しかも、この世の人とも思えぬ美しい顔だったのです。

平次はそれを、遠くの方から黙って見ておりました。何という

不思議な情景であつたでしょう。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

身投げする女

初出―「オール讀物」昭和十一年十二月号 文藝春秋社

身投げする女

底本―「錢形平次捕物全集」第三卷
河出書房 昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>